

午後の
談話室

第26回

外国語学部 交流文化学科

L.G.ボンド 教授

Lisa Gayle BOND

ペイラー大学文学部国際政治政策学科に在学中、交換留学生として初めて日本へ。卒業後カンザス州立大学大学院東洋言語・文化学科へ進学、文部省国費留学生として筑波大学大学院に留学。その後、筑波大学大学院 哲学・思想研究科修士課程を修了、博士課程単位取得満期退学。京都文教大学、関東学院大学などで英語教育に携わり、2017年に本学着任、19年より現職。

好きな言葉：“Though we travel the world over to find the beautiful, we must carry it with us or we find it not.” 美しいもの・すばらしいものを求めて世界中を旅しても、自らの中にそれを持っていなければ、見つけ出すことはできない——アメリカの思想家、エマーソンの言葉。また映画『スターウォーズ』で、ヨーダが「失敗こそ最大の師だ」と語るシーンには「まさにそのとおり!」と、涙が出るほど共感した。

趣味：読書、音楽(聴く・弾くなど)、旅行。日本の温泉が大好きで「お風呂三昧」がストレス解消法。

偶然から、道が広がる

日本との出会い

ボンド先生が初めて海外を訪れたのは、高校を卒業した18歳のときのこと。インドで約1ヶ月間を過ごした。「フランス語を勉強していたので、はじめはフランスに行きた

いと思っていたのですけれど、それでもこのインドでの経験があったことで、もっといろいろな国での生活を体験したい、そしてアメリカが他の国の人たちからどう見られているのかを知りたいと考えるようになりました」

大学に進学し、国際政治を専攻。やがて留学の機会を得ることができたが、行き先はやはりフランスではなかった。

「それが、日本と出会ったきっかけでした。その頃は特に日本のことを勉強していたわけでもありませんし、日本語も全くわかりませんでした。しかしこの留学が、その後の人生を変える大きな経験になったのです」

日本留学中に授業で取り上げられ、ボンド先生が強く惹かれたのが『歎異抄』だった。浄土真宗の開祖・親鸞の教えをもとに編まれたこの書物は、

哲学者の西田幾多郎らにも大きな影響を与えたという。ボンド先生もまた、古い書物の奥深い魅力に引き込まれ、日米の大学院で日本の思想史研究に取り組むことになった。

「学生の皆さんも、こうした出会いや偶然を大切にしてみてください。勇気を持って一歩踏み出せば、自分で考えているよりももっとたくさんチャンス、ずっと広い道があるはずです。もし失敗しても、それがあるから勉強になる。失敗はすばらしいことだと思います」

学びという旅

古典を読み解けば、そのものの魅力だけでなく、現在の日本社会・文化を理解するヒントも見つけられるという。

「歎異抄はもちろん、たとえば千利休の書物にしても、人間

のあり方や関わり方についての思想が示されています。古いものをゆっくり読み、考えを深め、日本の伝統や文化・思想への理解を持って世界を見ることもできたなら、どんなにすばらしいものとの出会えるだろうかと思います」

「コロナ禍にあつて、海外を訪れることはもとより、キャンパスでの授業も難しくなった。それでも、それぞれの時間を過ごす間に本や思想に触れることで「内なる旅を進められるかもしれない。そしてこうした経験は、人と出会うことや、一緒にいる相手の存在がどれだけ大切かを改めて考える機会になるだろう」。

「私が授業を楽しみにしているのは、教室で会う学生たちから刺激を受けられるから。オンライン授業ではそれも難しいのですけれど、この大変な経験を忘れず、今後にどう生かしていけるのか、皆さんと一緒に考えていくことをとても楽しみにしています」



MY RECOMMENDATION

ボンド先生の故郷は、アメリカ南部のオクラホマ州。日本の半分ほどの広さがあり、片手鍋(フライパン)のような形をしています。その郷土料理の一つが「フライドピクルス」。ピクルスにスパイシーなこもを付けて揚げたもので、「ハンバーガーショップでも付け合せとして選べるくらい、オクラホマではなじみのあるスナックです。ビールのおつまみにもぴったり」とのこと(ちなみに、先生は日本のビールがお気に入りだそうです。ほかにも納豆や枝豆、梅がお好きとのこと)。

また、旬を迎える夏にフレッシュな黄桃でつくるお菓子「ピーチ・コブラー」は、お祖母さまがよく作ってくれた思い出の味だとか。「アイスクリームをのせて食べると最高ですよ!」と、それは美味しそうな表情で教えて下さいました。